



エクランドWakakoのアメリカ便り

新生児医療の現場から

エクランドWakako RNC MSN NNP. 1991年BSN取得後RNとなる (Bob Jones University, Greenville, SC). CCU・ICU・NICUを経て2002年にNNP専攻でMSN (看護学修士) 取得 (Vanderbilt University, Nashville, TN). 卒業後NNPの専門資格試験に合格。現在Nashville市内外複数の病院のNICU医療を担う新生児専門医療グループに所属。
Mid Tennessee Neonatology Associates
2300 Patterson St. Nashville, Tennessee 37203-1878. USA
RNCNNP@hotmail.com

from
USA

24 Transition—看護職として迎えた節目—

2005年の終わり、新年の挨拶も兼ねたクリスマスカードがたくさんの方々から届きました。なかには、数年、または、10年以上会っていないの方々からのものもあり、ちょうど15年前に看護大学を卒業したばかりの私が就職したCCUで、お世話になった方からのカードなどもありました。貴重な一人ひとりとの出会いに心から感謝しながら、これまでを振り返り、新卒の私を指導してくださった方々へ、今の心境を綴った短いエッセイを送りました。

いろいろな変遷を経ながら看護の道を歩いてきて、ちょうど16年目になろうとしています。あるときはゆっくり、またあるときは早足で、各地点から見える景色を存分に楽しみながら、たまには土砂崩れで危うい思いをしたり、また、あるときは山の高さに圧倒されて先を疑ったりしながら、山登りをしてきたように感じています。

実際、看護・医療の世界は、頂点のない山登りだといつも思ってきました。到達したといえる日は来ないと思うのです。登れば登るほど、広い世界が見えてきて、自分の知らない、まだ学んだことのない世界が外に広がっていることに気づかされます。自分の不勉強さ、無知さを痛烈に感じながらも、過去への感謝と反省がまた新しいエネルギーになって私の背中を押していつてくれることを願いつつ、2006年が始まりました。

Transition 看護界でのホットトピックス

前置きが長くなりましたが、^{トランジション}“Transition”という言葉は、いま看護の世界でホットなコンセプトだといっても言い過ぎではありません。Transitionという言葉自体はなんの変哲もない、ただ「変遷・変化」を意味する小学生でも知っているような単語ですが、職業におけるTransitionは、「移行」「節目」と使われます (以後、Transition＝「移行・節目」の意味で用います)。看護の世界に身を置く私たちの中で、このTransitionを体験しない人はいないのではないのでしょうか。さまざまな状況でのTransitionの現象は、Qualitative Research (質的研究) の課題としても注目されて久しいかと思います。個人レベルでナースが体験するTransitionとして、文献に頻繁に出てくるのは、看護学生から新卒ナース

エクランドWakakoのアメリカ便り

へのTransitionです。そして、近年、アドバンスプラクティスナース (APN) の発達と定着とともに、一般スタッフナース (Registered Nurse ; RN) からナースプラクティショナー (NP) などのAPN職へのTransitionについての文献が増えてきています。というのは、一般看護スタッフとして、ベッドサイドでの看護経験を積んだ後、専門の学びを修めて、さら



1回分のFeedingがはじめて自分で飲めるようになった児に、「がんばったね」と声を掛けるスタッフたち

に拡大された責任のある (アドバンスプラクティスレベルの) 仕事をするようになる過程には、学生から新卒ナースへと移行するときよりも複雑な体験をすることが明らかになっているからです。そこで、今回は、RNからNPへといったように、RNからAPNへTransitionする場合に焦点を当てて、私自身のTransitionコンセプトとの初めての出会いと感動も交えてお話ししたいと思います。

私の体験した “Transition”

日本でも新生児集中ケアの認定看護師制度が発足しましたが、認定を受けた方たちが活動を開始し、新しい任務を定着させるプロセスと、欧米におけるRNからナースプラクティショナーのようなAPN職へと成長していくプロセスでは、同じようなTransitionの現象が起こるのではと想像しています。私自身が、看護の世界でのTransitionというコンセプトを体験したのは、あと数ヵ月で、大学院でのNeonatal Nurse Practitioner (NNP) の過程を修了するという頃のことでした。

その頃の私は、バンダビルト大学病院のNICUでクリニカルレジデンシーに明け暮れていました。当時の日常業務を一部紹介すると、毎朝 6 時過ぎにはNICUに到着し、当直のNNPかレジデントからとくに変わったことがなかったかを聞いた後、受け持ちのNICU患者のベッドサイドへ行って診察をし、看護記録、その日の検査結果など必要なデータを集めて、担当の看護師から状況を実際に聞きます。そして、一人ひとりの児のためにその日

APNs アドバンスプラクティスナース。大学院レベルの教育を修了し、一般ナースの経験を生かしつつ専門的な役割を持つナースを指す。APNに含まれる職種は、NP (Nurse Practitioner), CNS (Clinical Nurse Specialist), Nurse Anesthetist, Nurse Midwifeの4職種。

の計画を立てて、必要なオーダーを書きます。ベンチレーターのセッティング、胸部X線を見ること、細かいカロリー計算、全体の水分摂取量、薬品のリストと量、ミルクの量のその日の増加量などなど、見落としがないように児の状況を全体的にしっかり把握します。そのとき、学生だった私は重症度にもよりますが、4～5人の患者の担当をしていました。

午前9時半にはその日のNeonatologist（新生児専門医）とほかの研修医たちとのラウンドが開始されます。それぞれのベッドサイドへ行き、担当のレジデントやNNP、また私のようなNNPの学生がその患者の概要をざっとまとめて報告し、その日に書いた主要なオーダーも報告します。これは一緒に回る一人ひとりの教育チャンスとなるため、Neonatologistの中にはかなり込み入った質問を投げかけてきたりして、私たちの状況把握度を試されたりします。夕方、家へ戻っても勉強勉強、また、勉強、さらにリサーチ、論文が待っていました。そして、夜勤をまだ続けていたため、当時4歳だった息子や主人との時間と、勉強・仕事への時間の配分が大変難しい状況でした。寝不足の毎日でしたし、健康ではあったものの疲労感が絶えずありました。

考えれば考えるほど深まる悩み

仕事の忙しさに加え、精神的にもかなりのストレスを感じていました。大学院の単位数をこなすだけでもストレスなのは当然のことなのですが、私はそれまでの部署異動（CCUからNICU）や病院を移った際の看護経験では感じたことのない、言いようのない挫折感、自分への不信感、将来のまだ、その時点では見えないNNPとしての自分への不安と一種の恐怖感、アイデンティティの喪失感などを感じていました。毎日のレジデンス自体は大きな問題もなく順調に進んでいました。NNPプリセプターも、私のレジデンスの進み具合に問題はないとおっしゃって励ましてくださっていましたが、私の戸惑いには、せっかくの励ましもまったく効き目がありませんでした。そして、家族との時間、自分の時間、友人との関係などをかなり犠牲にしながらも、学業自体は順調に進んでいたのです。

つまり、表から見た順調さとは裏腹に、私の気持ちは、椅子取りゲームで味わうような、最後に音楽が止まったのに自分ひとり座る場所がなくてウロウロしているような心境に似たものがありました。自分の居場所がなくなったような、どこへいったら落ち着けるのかわからない感覚です。その当時、私はNICUナースとして約8年の経験があり、職場ではチャージナースなどの役割を務めたりと、ある程度NICU内での自分の仕事に安心感があったのは確かでしたが、その安心感がどんどん薄れていくのを自分ではどうすることもできませんでした。自分への自信を失った当時の私は、できたら自分の人生のテープを早送りして1年

エクランドWakakoのアメリカ便り

後の自分を見てみたいと思ったものです。もし、1年後にNNPとして、無事に「変貌（移行）」を遂げていたら自信喪失、不安感などから開放されるのではないかと、という心境だったのです。また、自分はおかしいのではないかと、心配しすぎているだけなのか、几帳面すぎて自分に厳しすぎるのか、などと、自分の気持ちを分析して安心感を取り戻そうとするのに、そうすればするほど、息苦しくなりました。

そんなとき、少なからず励みになり、興味深かったのは、そういった心境に陥っているのが私だけではなかったことです。状況や性格などが似ていて親しくなった数人の大学院の仲間同士で、レジデンシーの進み具合を話し合ったりするときに、感じていることを会話に出すと、ストレスなり、自信喪失感なりを友人たちも感じているようでした。細かく分析すれば、それぞれの感じていることには違いがあり、誰もがまったく同じことを体験していたとは思えませんが、少なくとも親友のリズやリサには、つらさを口に出すことがたびたびありました。私の気持ちを打ち明けると、彼女たちからも似たような思いが感じられ、かなり似通った精神状態にいるのではないかと思えたのです。けれど、お互いに状況改善への道を見つけることができず、早く大学院を卒業して、この苦痛から開放されたいと話していました。つまり、大学院の厳しさがストレスの根底にあると、大雑把に思っていたとっていいかと思えます。



本物と間違えそうなほどの、暖炉を模した壁飾り。NICU入り口ホールにあるクリスマス飾りとして、スタッフが作ったもの。雪だるまのオーナメントには、一つずつに赤ちゃんの足形がついています

ある論文が与えてくれた大きな励まし

そんなある日、レジデンシーの1日からへとへとに疲れて家へ戻ると、1冊の新生児看護雑誌が届いていました。早速手にしてページをめくり、目次をさっと見ると、1つの題が目に飛び込んできました。それは、“Transition to the Neonatal Nurse Practitioner, Making the Change from the Side to the Head of the Bed.”*というものでした。

この論文は、私を励まし、大いに力を与えてくれたのです。そこに何が書かれていたのか、詳しい内容については、また次週ご報告しますので、楽しみにしてください。

*Cusson, R&N. Viggiano. Transition to the Neonatal Nurse Practitioner Rold: Making the Change from the Side to the Head of the Bed. Neonatal Network. 21 (2), 2002, 21- 8.